天地の底ひのうら

『万葉集』には、しばしば壮大なスケールで激しい恋心を詠む歌があります。

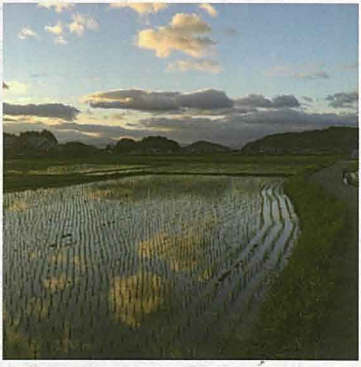
君が行く　道のながてを　繰り畳ね
焼き亡ぼさむ　天の火もがも
（十五―三七二四）

天地の　底ひのうらに　吾が如く
君に恋ふらむ　人は実あらじ
（十五―三七五〇）

これらはいずれも、狭野茅上娘子が中臣宅守へ贈ったとされる歌です。

三七二四番歌では、二人の間を隔てる長い道のりをたぐり寄せて畳んで焼き尽くすような天の火が欲しいと詠み、三七五〇番歌では、天地の果てにも私が思うほど強い思いであなたに恋している人はけっしていないだろう、と詠んでいます。

二人は相思相愛でしたが、このとき遠く離れて暮らしていました。『万葉集』やその他の史料などに拠ると、宅守は越前国に配流されたようです。理由は諸説いわれていますが、少なくとも現存する『万葉集』には明記されていません。


天と地がとけ合う夕景（明日香村）

むしろ、二人の贈答歌が六十三首にものぼり、巻十五の後半部に一括されているという特異なあり方をみると、配流の理由がいかなるものかはともかく、この歌群が一種の悲恋物語として位置付けられ享受されていた可能性が高いといえます。六十三首すべてが二人の実作であったかどうかも疑問です。

ただ、女性が一人で旅をすることなど考えられなかった当時、都から遠く離れた場所に配流された恋人と逢う術はない―そんな状況下で詠まれた歌だと想像すると、彼女の思いが身に迫ってくるようにも感じます。

「天の火」「天地の底ひのうら」など、はじめてこの歌を読んだとき、その壮大な想像力に感嘆しました。思わず、ハイネの「宣言」という詩を連想しました。ノルウェーの森の一番高いモミの木を引き抜き、エトナ山の噴火口に浸して、夜空いっぱいに恋人の名前を書き、愛を宣言する、という詩です。

二度と会えないかもしれない恋人への思いを胸に、世界の果てに思いを馳せつつ毅然として生きる。古代にもそんな女性像があったのかと驚きます。

（万葉文化館主任研究員・井上さやか）